ほぼ隔月刊

中山間タイムズ

10年住み続ける、わがまち（むら）づくりのお手伝い

第３号
（10月20日）
発行
富山県
中山間地域対策課
お問合せ
076-444-4578

永久的警告と書かれた額が教えてくれたもの

黒部市の東布施公民館の一階ロビーに、「永久的警告」と書かれた額が掲げてあります。

※令和三年話し合い実施地域

その額には渓谷にある村が河川の氾濫にのみこまれている様子が描かれた絵が下地になっていて、その上に「永久的警告」という物々しい言葉から始まる長文の書がしたためられています。

この書の原文は、明治四十五年七月の洪水の状況を当時尾山小学校の校長であった谷島清六氏が村の将来の子孫に伝え、このような惨事を再び招かないように記録したものだそうです。

背景の絵には濁流の荒々しさやその氾濫範囲の広さがうかがえ、恐怖を感じてしまうほどのインパクトがあり、長文の書を読み進めるにつれ、大洪水の被害（注）が想像以上に甚大なものであったことがわかります。

（注）七月二十一日夜半から二十二日早朝までの大豪雨により黒部川が大洪水となり、堤防の破堤・決壊箇所が四十八、約千八十ヘクタールが浸水。そして二十三戸の家屋が流失し、浸水した家屋は千七十八戸に及んだ。

谷島氏は、村内の口碑に九十年前にあった大洪水の状況が記されていたにもかかわらず、同じ場所で地滑りや洪水の被害があったことに触れ、「今もその惨状を伝ふ当時の惨状にあえたる人は必ず今後かかる災害あるも再び悲惨のあらざる様、それぞれの注意をなし子孫をいましめたるならんも、歳月を経たる今日いつしか、これを忘れたるものならん。」とし、最後を次の「警告」で締めくくっています。

今年の「防災日」は過ぎてしまいましたが、子どもの頃に見たことがなかった竜巻が新潟県沖で複数回発生したり、線状降水帯という耳慣れない現象が日本各地で記録的大豪雨をもたらしている今、この額から学べることは少なくないのではないでしょうか。

東布施公民館では、常時この額を一ロビーの真ん中に掲出しています。

警告

一、本災害は百年目毎に再現するものと覚悟すべし
二、宅地の東、西、北の三面は樹林をもって囲むべし
三、渓谷の正面に家宅を求むべからず
四、やや大なる渓流を有する渓谷には欅林を養成すべし
五、山林の乱伐は厳禁すべし
六、村民は一致共同、公益を尊重し、以って警告の実行に務むべし

大正二年七月　　尾山小学校長　谷島清六

'23 Aug Memory　砺波高生と東大生が地域活性化で交流

砺波市栃檀山で開催された東大FSより。プライベートの交流も続けられているようです。

ともにそば打ちを体験

小矢部市五郎丸地域（川原俊昭さん）

ヒガンバナで里づくり

小矢部市五郎丸の五郎丸川の川沿いを中心に約十二万本のヒガンバナが咲きほこり、県内外から「インスタ映え」を求めて多くの鑑賞者が訪れています。

「ヒガンバナの里づくり委員会」事務局長・川原俊昭さんによればこの事業は黄色い稲穂を縁取る深紅のヒガンバナという四～五〇年前の日本では当たり前にあった風景が区画整理などで失われて行くのを憂いた同地の有志十一人が委員会を結成して、二〇〇一年から始めたものです。

川原さんは「最初は自分たちが楽しく出来る本当に小さな試みで、地域おこしに繋げようなどと考えてはいませんでした」と当時を振り返ります。

そうして始めた事業は年ほど前から、SNSなどの普及もあり徐々に鑑賞者も増えていきました。

それに対応するために、トイレ、案内看板の設置、鑑賞MAPの自作、さらに今年は長野県小谷村から使われなくなった水車を移設するなど年々、訪れる人々を楽しませる環境を充実させてきました。今では、ヒガンバナの開花期間中は約二〇〇〇人が訪れるようになりました。

それに伴い地元の農家が、作物を販売するなど小規模ながら野菜直売所の役割を担うようにもなってきました。近隣に地域の直売所があるため大きくは拡充できないものの今年から、「是非、球根が欲しい」との要望に応え新たに球根を三球三〇〇円で販売したところまたたくまに売り切れたと言います。

川原さんは「周りの人々の協力もあって、思いがけず大きな事業に発展しました。さらにアイデアを出し合いより多く人々に五郎丸という地域をアピールしていければ」と抱負を語っていました。

☆写真右上から
- 自ら植えたヒガンバナと川原さん
- 今年設置された水車
- 遠方からも多くの人々が訪れる
- 委員会自作のMAP

地域コンシェルジュの中山間地放浪記

昭和遺産

富山地方鉄道（宇奈月地区）
うちやま駅

ここには世代によっては懐かしく、若者には映像でしかみたことのない昭和の景色がある。富山地方鉄道の前身、黒部鉄道から開通して今年で百年。駅舎は築七十年以上経過していそうな趣がある。二面二線の相対式ホームで駅本舎は下りホーム宇奈月方にあり、構内踏切で上下ホームが結ばれている。もちろん無人駅である。ホームは石垣の上にコンクリート、石垣は百年前の開通当時に作られた物か？　待合室には木製の長いベンチ（丁寧な家具工事）がある。

又、昭和時代の広告「学生服は大楠公・毛糸はカネボウ」「衣料品なら深井へ三日市町栄TEL435（ナント三ケタ）」と書かれた鏡もある。この駅で最も昭和らしいのがトイレ（便所）。トイレは駅本舎と離れて設置され、一坪程度の木造トタン張り。白ペンキで外壁に大きく「便所」と。汲み取り式・和式で懐かしい小便器、金隠し（大便器）が健在。特に大用の扉は扉と言うよりは戸でまさに雪隠戸、鍵は木の棒をスライドさせて締める様式である。使用には少し勇気がいるが、地域住民により徹底的に清掃され清潔に保たれている。時間が合えば、西武鉄道旧レッドアロー号など昭和に活躍した電車とも会える。まさに昭和にタイムスリップできる駅。駅は今も通学、通勤、買い物の足として日常使いされている。地域では駅改修の話も度々出るようだが、この昭和の景色を求めてはるばる京都から見学に来た人もいるとか。今しばらくはこのままでと言う意見も少なくないようだ。